

Elaine Fuchs博士を京都にお迎えして

山中 伸弥

高松宮妃癌研究基金第三十九回国際講演会にて、米国ロックフェラー大学哺乳細胞発生生物学研究室教授、ハワード・ヒューズ研究所研究員であるElaine Fuchs博士をお迎えし、二〇一九年六月三日に京都大学芝蘭会館稲盛ホールにて、“Stem Cells in Silence, Action and Cancer”（幹細胞―静止期、増殖期、がんにおける動態―）という演題でご講演いただきました。京都に来られる前には、五月二十四日国立がん研究センター、五月二十九日北海道大学医学部学友会館フラテにてご講演をされました。

Fuchs博士は、長年、皮膚の組織モデルを用いて哺乳動物の幹細胞について研究し、さまざまな卓越したアプローチによりすばらしい成果を数多く出され、皮膚生物学の分野を牽引されてきました。

また、幹細胞や創傷治癒、組織修復などのメカニズムを用い、皮膚細胞の研究だけでなく、がん研究にも関わってこられました。生物学分野で常に第一線で活躍するFuchs博士は、私にとってあこがれの存在であり、最も尊敬する研究者の一人です。

ご講演当日は、Fuchs博士の研究内容を直接拝聴できる貴重な機会とあって、京都大学芝蘭会館稲盛ホールには一六三名もの

さまざまな分野の研究者や学生が参加しました。ご講演では、皮膚や毛髪が一種類の皮膚幹細胞から発生することや、また、皮膚幹細胞が皮膚や毛髪を作り出すメカニズム、傷が癒える仕組みの解明に端を発した、がんなどの皮膚病の遺伝的基盤に関する研究を、最先端の研究成果を含めながらわかりやすくお話しいただきました。ご講演に対して聴講者から多くの質問があり、一つ一つ丁寧にお答えいただきました。本当に素晴らしい充実した講演会であったと感じております。

ご講演の前には、京都大学 iPS 細胞研究所の十五名の若手研究者とディスカッションをする場を設けてくださいました。研究者としてのキャリアパス、研究のアイデアをどのように見つけるか、研究室の運営についてなどの若手からの質問に対し、とても熱心に答えてくださったと聞いています。

また、研究者としての資質、基礎研究の重要性、臨床応用研究の大切さを述べられ、参加した研究者からは「研究者にとって良い刺激になる内容ばかりで、ディスカッションの時間が足りないぐらいだった」との声がありました。若手研究者にとって充実した時間だったのではないかと、Fuchs博士のご厚意に感謝申し上げます。

また、Fuchs博士は、京都ご滞在中にご家族と市中の名所を見学され、日本の伝統に触れられたと伺っております。Fuchs博士に、京都ならではの美しい自然や歴史ある神社仏閣を楽しんでいただけて、我々も本当に嬉しい限りです。



Dr. Elaine Fuchs と筆者

最後に、このような貴重な機会を頂きました、高松宮妃癌研究
基金と関係者の皆様に、心から感謝申し上げますとともに、厚く
御礼申し上げます。

(京都大学 iPS 細胞研究所所長)